

第九話 下水という言葉(その二)

祝詞の示唆するもの

はじめに

柳田国男先生は、下水という言葉について概ね次のような事を言っています。

「下水という言葉は、「ゲス」という言葉と「ギ」という言葉からなり、最初は「肥料溜め」を意味していた。漢語ではなく、当て字である。」

私は、下水という言葉にこのような分析を加えた人を他に知りません。しかし残念なことに、先生は下水という言葉をも「忘れてもよい語」に分類し、これ以上の分析は敢えて行いませんでした。そこで私は、柳田先生の分析を更に一歩進めたいと考えたわけです。問題は、「わが国の古代に「ゲスイ」という言葉があったのか、仮に存在したとすれば、何を意味していたのか？」ということなのです。

仮説

私は、「ゲスイ」という言葉を古代日本語、即ち大和言葉と見なし、その最初の意味にアプローチするための最も有効な手段は次のようなものだろうと考えました。

先ず最初に「ゲスイ」という言葉を構成する要素を取り出します。次に個々の要素に常識の範囲で適切と思われる意味を当てはめ、その上で全体の意味を読みとります。このようにして得られた幾つかの意味のうち常識に合うものは残し、そうでないものは落とします。最後に古代の文献に拠って残った意味が示唆する対象を判断し、最終的な意味を決めます。

さて、このように難しいことを言っても「ゲスイ」という言葉の字数は仮名文字で僅か三字ですから、要素を取り出すことは至極簡単です。ただ私がその際に拘った事実は、古代

稲場紀久雄

日本語では語頭に濁音やラ行音を用いなかったことです。この事実、三木幸信先生の『日本語の歴史』に書かれています。また大野晋先生の『日本語の起源』には、「(アイヌ語では)清音と濁音を区別しない」という記述があります。この事実を正しいものとしますと、古代にあつては「ゲスイ」は「ケスイ」と言われていたことになります。そこで私は、「ケスイ」を基本とすることにしました。

さて、先ず要素分解ですが、「ケスイ」という言葉をどんなに要素分解してみても三通りしかありません。つまり次の通りです。

- (一) 「ケ」と「ス」と「イ」
- (二) 「ケス」と「イ」
- (三) 「ケ」と「スイ」

私は、以上の三通りのケースのうち最後の(三)はなんとなく現代の下水という言葉の要素に通じる所があると感じ、敢えて落とすことにしました。実は最後には復活するのですが。

次に個々の要素への意味の当てはめです。私は、次のように考えました。

(一) に対して、「ケ」は「異」、「ス」は「為」、「イ」は「井」あるいは「池」。ここで「ス」は「する」、あるいは使役の助動詞と考えます。

(二) に対して、「ケス」は「消す」、「イ」は「同前」
とところで「イ」は「居」、即ち「そこに在る」ことを意味すると考える事も出来るでしょう。

このように個々の要素に意味を当てはめた後、言葉全体の意味を考えますと、(一)の場合も(二)の場合も「元に戻す装置」、例えば沈澱池のような装置を意味しているように思えます。極論しますと、「ケスイ」は古代にあつては「浄化槽」を意味していた可能性があります。

さて以上に述べたような考え方や結論は多分に我田引水であり、批判を受けてもやむをえません。問題は、国語学の立場からそれなりに正しいのか、それとも間違っているのか、ということですが。そこで私は、この疑問を解くために奮勇を振るって国語学の大家大野晋先生に手紙を出しました。さらに国立国語研究所の宮島達夫、高梨信博両先生を訪ねました。今考えますと冷や汗千斗という思いですが、先生方はご多忙の中を私のために時間を割いて下さいました。私の見解に対する先生方の意見は、次のようなものでした。

大野晋先生の意見

先生は、私の見解に対して概ね次のような意見を述べられました。

(一) 下水という言葉は、近世に於いて都市的集落が形成さ

れるようになった頃、上水の対語として生まれた比較的新しい言葉であると考える。即ち、上水は飲料水また用水、下水は不用の水、捨てる水。

(二) 古来農村では排水を浄化する必要性は存在しなかつたと考える。

(三) ゲスイという言葉は大和言葉としてはなじまない。漢字であると思う。字引を引いても「え、け、せ、て、ね、へ、め、え、れ、ゑ」で始まる言葉が極めて少ないからである。

(四) しかし古い時代でも全くゲスイという言葉が無いわけでは無く、平安時代では「下種」と書き、意味は生まれが卑しい者の意である。室町時代の字引にも「下水」という言葉が載っているが、この場合は風呂等の排水を指している。

(五) 下水を濁音を取って「ケスイ」と考えるのは出来ないことではない。しかし、仮にケスイを(ケススイ)と考へるとした場合、次のように考へる。

(ケ) 古い言葉とは考へ難い(理由は上記の(三))。

(ス) 意味が決められない。

(イ) 井戸の井と考へることは出来る。

(wi (井) ↓ i (井))。

次に(ケススイ)と考へた場合でも私には(ケス)という言葉が古い言葉として存在したとは考へ難い。

(六) 昔(ケス)であつたものが、どうして(ゲス)に変わった

たのかも考へるべきだろう。やはり(ケ)は、漢字の「下」と考へるのが適當ではないか。

(七) 以上の考へから柳田国男説は疑問であるが、語源というものは何が正しいのか簡単にきめられるものではない。

以上の他に先生は、茶道では茶器を洗つた水をゲスイと言つとも言われました。

大野先生は、基本的に私の見解を否定され、併せて柳田説に疑問を提されたわけですが、その見解には説得力があると云わざるを得ません。

しかし、多少とも救われた点は、私の見解の極一部ではありますが、否定されなかつた部分があつたことです。

私が、大野先生からこのような御意見を頂いた後、さらに国立国語研究所を訪ね、宮島、高梨の両先生に御意見を求めました。

宮島達夫先生の見解

実は、私に国語研究所を訪ねるように勧めて下さつた方は、石毛直道先生(国立民族学博物館教授)です。私は、「とうきゅう環境浄化財団」が主催した多摩川視察行で石毛先生にお会いし、一夜奥多摩の山荘で話をする機会を得たのです。先生は私の見解を聞かれ、是非国語研究所を訪ねるべきだと言われました。先生が私の見解について言われた感想は後で話し

ます。

私が国語研究所で最初にお目にかかった宮島達夫先生の御意見は次の通りでした。

(一) 国語学は、用例の存在を第一義とし、現状の知見で知り得る確実な用例からさらに古い用例を探索して語源に到達するといったアプローチを行なうのが原則である。

(二) しかし、ある用例の存在の可能性を前提として、ある種の仮説をたて、その仮説に基づいて用例を探索することがあってもよく、かかる手法を否定するものではない。

(三) ところで、国語学の立場から君の(即ち私の)見解を考えると、三つに分けることには無理がある。(ス)は文法に反し、説明出来ない。分けるとすれば、(ケス)+(イ)であるが、(ケス)の用例が無い。(ケス)と考えても、終止形が繋がるのはおかしい。また連用形ならば(ケスル)イとなるが、これも無理がある。

(四) 私としては、九分どおり漢語であると思う。そして汚れた水を意味していると考える。

以上のように宮島先生は、大野先生同様、私の見解を妥当性に乏しいとされるとともに、柳田説に疑問を呈されました。先生の御意見は、私にとって大野先生のそれよりも一層厳しかったのです。私は、そのように受け止めました。最後に先生は、この種の問題は、高梨先生の御意見を聞く必要がある

と言われ、紹介して下さいました。そこで私は、高梨先生を訪ねたわけです。

高梨信博先生の御意見

私は、高梨先生に私の見解とそれに対する大野、宮島両先生の御意見を詳しく話しました。先生は、私の説明を聞き終わるや、概ね次のような意見を話されました。

(一) 国語学的には大野、宮島両先生の御意見で尽きていると考える。

(二) 三つに分ける考え方は無理である。従って仮説とすれば(ケス)+(イ)である。これはあくまで用例を第一義とするためである。(ケス)+(イ)は、用例がない。しかも(終止形)+(名詞)であって、無理がある。

(三) 柳田説の場合(ケス)は名詞であり、この点妥当である。この説を否定することは出来ない。国語学的には無理ではないからである。今となっては確認のしようがないが。

(四) 私としては日本で作った漢語の可能性があると考える。日本独自の意味を与えたのである。

(五) 字引を見れば、江戸時代の早い時期に下水という言葉になっていくが、室町時代が最初のものである。(ケス)の場合、奈良時代まで溯ることは難しいだろう。

私の見解は、ここに至ってほとんど否定されたといってよ

いでしよう。だが、柳田説は、国語学上は問題ないと考えても良いようです。

柳田先生は、下水という言葉は当て字であるといわれました。それを私は大和言葉と解しました。ところが、大野先生と宮島先生は漢字であると判断され、高梨先生は日本で作られた漢字であると考えられました。下水、漢字で僅か二字の言葉でさえ、このように奥の深いものであるということに今更ながら驚嘆する思いです。

ここで三先生の御意見を私の独断で次のようにまとめておきます。即ち、「下水」という言葉は漢字ないしは日本で作られた漢字の可能性が高く、かなり新しい言葉、少なくとも室町時代以降の言葉であろう。仮説の(一)、(二)には無理がある。柳田説は否定出来ないが、仮に正しいとしても奈良時代まで用例を溯ることは難しいだろう。」

石毛直道先生の示唆と発見

私の見解はこうして暗礁に乗り上げたわけですが、人類発祥以来人間は少なくとも下水という物質を生み出しているのであります。古代の人間は、この物質に何等かの言葉を与えていたに違いないのです。日本には漢字が中国大陸から伝わる以前から人間が住んでいました。そのような時代にも人々は下水という物質を生み出していたのです。彼等は、その物

質を何と呼んでいたのでしょうか。国語学は科学であり、従って主張には明確な根拠が必要です。逆に根拠薄弱な主張は、所詮無意味なのです。しかし、そこを一步踏み越えないと未知の領域に入ってしまうことは出来ません。下水という言葉は漢字であり、漢字が入ってくる以前のこととは分らないという知見を得ただけで私がこの研究から撤退することは、私の気持ちに許しません。幸いにも私には極めて貴重な手掛かりがありました。それは、石毛先生が私の見解を聞いて言われた次のような感想です。

「柳田先生は、極めて感覚の良い方で、傾聴に値する数々の学説を立てられています。下水という言葉の場合も無下に否定すべきものではないと思います。(ケ(褻))は、(ハレ(晴))に對する(ケ)かもしれませんね。」

石毛先生は、要素分けに関して仮説の(三)をむしろ自然と感じられたのでしよう。私は、最初取って仮説の(三)を除外しましたが、先生は、そのように思われなかったのに違いありません。

(ハレ)と(ケ)、これらの言葉は大変古い言葉であると考へても良いでしょう。(ケ)という言葉は「日常」を意味します。そして同時に「不潔」という意味をも含みます。

(ハレ)は、その反対で「非日常」の意で、まさに「晴舞台」の晴です。下水という物質は、日常的に生まれる汚れた

水であります。

この事実を踏まえますと、(ケ)を(ハレ)の反対語と解することは、至極もつともであると考へても良いのではないのでしょうか。つまり、(ケスイ)は、(ケナスイ)であり、それは他でもない(糞水)であるということです。

私は、ここで敢えて(スイ)という言葉(衰)と解釈してみました。つまり(ケ衰)。これは日常が衰えるという意味に他なりません。ここまで来ますと、(ケガレ(穢れ))という言葉が直ぐに思い出されます。ある学説に拠りますと、(ケガレ)は(ケ枯れ)、つまりケが枯れることを意味していると言います。仮にこの論法を認めますと、(ケ衰)は、(ケ枯れ)に通じるといふことが出来ましょう。(ケガレ)は(汚れ)でもあります。下水もまた汚れた水であります。ここに至つて私は、古代に一步踏み込み得たと感じました。何故なら(ケガレ)を最も嫌うのは神道で、(みそぎ(禊))や(はらい(祓))を重視します。しかもこの場合は最も原始的な神道でなければなりません。(ケスイ)という言葉は神道に係わりある言葉である可能性があるのではないのでしょうか。こうして私は、一筋の希望の光を見ることが出来たのです。

ところで、今話しましたことは、やはり一つの仮説であります。しかもまたここでも我田引水そのものかもしれない。この仮説を立証するためには、例え状況証拠であっても、そ

れなりに客観的な根拠を提示しなければなりません。

文献調査の結果、『日本民俗語大辞典』(石上堅著、桜楓社の(ケ(糞))の項に「塵芥棄場のことをケヤマ、納屋のことをケゴヤ、普段着のことをケギと言う。」という記述を見つけました。これらの言葉には全て「日常」「普段」という意味で(ケ)という言葉が使われています。このことから日常の汚れた水を表す言葉に(ケ)という言葉が入つていておかしいことは何一つありません。むしろ入っていない方が余程疑問であると言えましょう。

ところで私は、今話しました事実以外に極めて重要な発見をいたしました。奥多摩の丹波山村で伊藤巖という方(丹波山村議会議務局長)から次のような事実を聞いたのです。

「丹波山村では昔、下水のことを(ケゴウズ)と言つていました。(ケゴウズ)は大変綺麗で、うっかり飲んでしまうほどでした。恐らく誰でも一度は飲んだ経験があるのでは無いでしょうか。」(一九八九年二月)

丹波山村は、多摩川上流の東京都に隣接した山梨県側にある大変古い村です。小菅村という隣村の方が旧いようですが、丹波山村もかなり歴史があります。従つて現在では消滅したような珍しい習俗がいまなおここには残っています。伊藤さんは、現在五十八歳ですが、大変昔のことに詳しい方です。

私は、(ケゴウズ)という言葉聞いた時、思わず「本当で

すか」と聞き返しました。下水を意味する(ケ)という言葉の付いた言葉が現実に使われていたというのですから。

檜原村(丹波山村にも近い東京都に残された唯一の村ですが)では水の事を(ウズ)という事は既に「その一」(『下水文化研究』第二号所収)で述べました。このことを思い出して頂きますと、(ケゴウズ)という言葉には(ウズ)という言葉が含まれていますから、水という言葉が入っていることがすぐ分かります。(ケ)も入っており、(ウズ)も入っている。従って、分らない言葉は、(ゴ)だけです。この(ゴ)は、(ゴウ)であるのかもしれませんが、私は、差し当たり(合)という言葉字を当てはめておきたいと思えます。そうしますと、(ケゴウズ)とは(ケ合水)、即ち(養合水)であります。つまり、(け水)に他ならないのです。この用例がどの位まで過去に溯ることが可能であるのか、それは全く分かりませんが、しかし、少し前まで実際に(ケスイ)に相当する言葉が使われていたという事実は注目すべきだと思います。現に用例があったということです。その事実を強調したいのです。かくして活路は、開けました。

さて、次に必要な作業は、文献によって下水という言葉の意味の変遷をたどることです。果たして下水という言葉は、どの時代から文献に現れるようになり、何年頃から現在と同じ意味で使われるようになったのか、先ずこの課題の追及が

必要です。その次に、神道との関係を検討しなければなりません。いずれも大問題ですが、以下に私なりに調べた結果を報告したいと思います。

字引による探索

私は、国文学には全く門外漢ですから、古文獻を一つ一つ紐解いて下水という言葉を探求することなど、所詮無理な注文です。この際は、權威のある字引に依存する以外に方法はありません。石毛先生は、私に諸橋先生の『大漢和辞典』と小学館の『日本国語辞典』は必見の字引だと教えて下さいました。言に違わず、これらの字引は膨大なもので、誠に貴重ながわが国の財産とも言えるものでした。私は、この二冊に富山房の『新編大言海』と『古事類苑』を加えました。最初の方は、石丸浩氏に関係部分を送っていただきました。

『大漢和辞典』(諸橋)の「下水」の項を検討しますと、下水という言葉の意味の一つに「汚水、それを流す溝」というものがあります。しかし、それは大変新しい時代のものであって、本来の意味は「水を流す」ということのようにです。つまり「下」と「水」の間に返り点が入るのです。「戦国」、「東周」に載っているという次の文章は印象的です。

「東周、稻を為すを欲す。西周、水を下さず。」
周の時代と言えば、紀元前数世紀、孔子の時代のことです

が、その頃には下水という言葉に汚水や溝という意味は含まれていないと考えて良いように思います。中国でも日本から逆輸入された漢字、従って実は日本語というものもあつたわけです。高梨先生が言われた日本で作られた漢字がある以上これは避けられません。つまり言葉の意味は、時代によって変わるわけです。私は孔海南氏に疑問をぶつけてみました。孔氏の解答は、第四話に載っていますが、やはり日本での意味とはちがっているようです。

『現代中国語辞典』（光生館）によりますと、『下水溝』のことは「**脏水沟**」と言うようであります。私は、以上の事実から「下水」という言葉は中国の生粋の言葉ではない。現在中国に下水という言葉は存在するが、それは恐らく日本から逆輸入されたものである。」と考えます。

次に『日本国語辞典』（小学館）の「**げすい**（下水）」と「**げす**（下種、下衆、下主、下司）」の項を検討してみます。

まず「**げすい**（下水）」です。この項目には「**運歩色葉集**」、「**甲陽軍艦**」、「**談義本教訓雜長持**」、「**日葡辞書**」、「**和訓栞**」等に記された「**げすい**（下水）」の用例が紹介されています。これらの書物のうち最も古いものが「**運歩色葉集**」で、西暦一五四八年の発刊です。戦国時代末期で織田信長や武田信玄が活躍していた頃ですが、その頃には「**げすい**（下水）」という言葉は「**汚水等の排水**」を意味していました。

面白いのは「**日葡辞書**」です。この字引は、一六〇三年に日本イエズス会が発刊しました。この字引には次のように書いてあります。

「茶の湯で中に水をこぼし入れるのに使う或る器。ただし、より正しくは、この器に入っている水の意に取られる。」

この記述によりますと、「**げすい**」は確かに排水の意には違ありませんが、茶器を洗った水という極めて特異な排水の意なのです。「**和訓栞**」（一七七七年以降三回発刊されている。）にも同様の用例がありますが、「**建水**の音転して、**げすい**といふともいへり」という記述があり、注目しておきたいと思えます。「**建水**」とは「茶碗をすすいだ水を捨てる具」のことです。

さて、次は「**げす**（下種、下衆、下主、下司）」であります。「身分が卑しい、品性が下劣な人」という意味で、紹介された用例の典拠のうち最も古いものは「**源氏物語**」です。この書物は、西暦一〇〇八年に公にされた平安時代の古典中の古典です。「**げす**」が「**人糞肥料**」、「**しもこえ**」を意味したという事実は、この項では方言として紹介されています。

「**下水**」に関連して「**下水道**」という項を見ますと、この言葉が載っている文章として「**御触書寛保集成**」の寛文元年の項が紹介されています。その頃既に「**下水道**」という言葉は存在したわけです。

さて、三番手は、『新編大言海』です。この字引は、『日本国語辞典』の域を出ませんが、「げす」の用例として、『枕草子』が紹介されています。先に述べたのと同じ意味で使われているのですが、この書物は『源氏物語』より少し早い西暦九九六年に公にされました。

最後に「古事類苑」ですが、この書物の「下水」の項にはさまざまの古文獻から「下水」に関連ある記述が抜粋され、実に丁寧に収録されています。まさに貴重な書物であります。が、今までに述べた以上の成果は得られませんでした。

字引によって得られた結論を纏めると次のとおりです。

「下水という言葉は、純粹な漢語でなく、本来汚れたという意味を含まない可能性が高い。汚れた排水、あるいはそれを流す溝という意味に使われた用例は、戦国時代末期まで溯ることは出来たが、仮にあらゆる古文獻を当たつたとしても奈良時代以前まで溯ることは不可能であるように思える。この点は、大野、宮島、高梨三先生の示唆の通りである。

字引は、方言として(ゲス)に「しもごえ」という意味があることを紹介している。方言を庶民の中に語り継がれてきた言葉と解すると、原日本語に繋がるものと考えることも出来る。柳田説はやはり注目に値する。」

古代に分け入って下水という言葉を調べる手段を別に考えない限り、いかなる字引を用いたとしても、これ以上の結論

は得られないと思います。

祝詞の中の状況証拠

下水という言葉は、神道に係わりがありそうだとこのことを先程申しました。神道に關係する文章と言えば「祝詞」があります。祝詞が出来たのは飛鳥京時代(六七二〜六九四)又は藤原京時代(六九四〜七一〇)と推定されていますので、大変古い。古事記より相当古いのですから、恐らく日本最古の文章と思つても間違ひではないと思ひます。

私は「六月(みなづき)の晦(つごもり)の大祓(おほはらへ)」という祝詞を読んで、次の部分に興味を持ちました。先ず第一点は、「屎戸(くそへ)」という罪があつたことです。「屎戸」とは「きたないものをまき散らすこと」です。第二点は、次の記述です。即ち、「遣(のこ)る罪はあらじと祓(はら)へたまひ清めたまふ事を、高山・短山(ひきやま)の末より、さくなだりに落ちたぎつ速川の瀬に坐(ま)す瀬織つひめという神、大海の原に持ち出でなむ。かく持ち出で往(い)なば、荒塩の塩の八百道(やはぢ)の、八塩道の塩の八百会(やはあひ)に坐す速開(はやあき)つひめといふ神、持ちかか吞みてむ。かくかか吞みては、氣吹戸(いぶきど)主といふ神、根の国・底の国に坐す速(はや)さすらひめといふ神、持ちさすらひ失ひてむ。」

この記述は、罪を消すメカニズムを地球規模に拡大して、実に壮大に述べております。罪とは、「ケガレ(糞)」であり、私は、いかなる記述でも、いかなる創造でも、何等かのヒントがなければ生み出されないと考えます。私は、この記述をうんと縮小して畳一枚位にして考えてみました。そうすると、そこにはいわゆる沈澱池が想像出来るのです。汚れた水、その中に含まれた小さい汚濁物が沈澱池に流入します。汚濁物は、少し流れ、やがて底の方に沈んで堆積し、次第に分解され、最終的には元の姿を止めなくなります。このような浄化の過程を分解し、ここにそれぞれ神の存在を意識して極めて大胆に記述しますと、今紹介したような記述になる可能性があります。私は、祝詞のこの部分は沈澱池というモデルがあつて、その機構を十分に観察した上で書かれたものに違いないと考えます。第一点として述べました「屎戸」は罪でした。この罪を免れるためにどうしたのでしょうか。よごれたものは無限に生み出されるのです。浄化するか、溜めるか、どちらかでしょう。後者の場合は溜める場所を無限に探し、一杯になる度に変えて行く必要があります。汚水のよごな液体の場合、溜めることは容易ではありません。それならどうするか、浄化です。昔のことですから、汚れていても綺麗なものです。極めて簡単な沈澱池で充分だったことでしょう。祝詞はこのように、「古代、汚れた水、即ち下水が浄

化されていた」という仮説に一つの状況証拠を提供しています。

下水という言葉は「ケ水」であり、それはとりも直さず「糞水」の意です。神道は「けがれ(穢)」を嫌い、「祓」「みそぎ」を重要なものと考えます。祝詞の中には沈澱池がモデルになっていると考えられる部分があります。これらの解釈は、全て極めて密接に関係するものであり、それはただ一つの事実を私達に示唆しているようです。それは、「無秩序な下水処分はあり得なかつた」という事実です。古代、日本人の先祖はかなり高い下水文化を持っていたことは間違いがありません。下水という言葉を通してそれが透けて見えるような気持ちに致します。

そもそも古代にあつては「あの世」と「この世」の間に往復の回路があると考えられていました。「この世」から「あの世」へ一方方向しかなく、しかも天国か地獄かという二者択一という考え方ではないのです。このような循環の死生観を持つ場合、この世を汚濁させてはならないという気持ちが強くなるのではないのでしょうか。

循環の思想という観点からは、水をあの世から頂き、再びあの世に帰すという考え方があつたとも考えられます。時代が下がるにつれて前者に対する感謝だけが残り、後者が忘れられていったのではないのでしょうか。その感謝の気持ちさえ

今や薄れるばかりのようです。文化の衰退ということも出来ましよう。

最後に上水という言葉ですが、私はこの言葉は下水という言葉が出来てから、その対語として生まれたのではないかと考えています。下水という言葉は、上水という言葉より古いと思われかけです。

さてさて、下水という言葉僅か漢字にして二字、音にして三字の極めて簡単な言葉なのに、一度その奥に迷い込みますと、道は細く暗く、どこまでもはてることなく続いているようです。まだまだ半分の道程にも達していかないかもしれません。

言葉は、文化の象徴だと言われますが、まさにしかりということを実感いたします。古い文献としては「古事記」や「律令」があります。「祝詞」もまた私のような門外漢には極めて難解であります。しかし、少なくともこれらの文献をつぶさに検討する必要があります。私にはまさに至難な仕事であります。時間をかけて少しづつ研究し、将来何時の日かこの続きを報告いたします。

討論

上ノ土 私は、「ゲスナイ」か、「ケナスイ」かどちらかだろうと思います。その前に固形物としてとらえたか、水としてとらえたか、どちらだったかということに分かれるように思

います。柳田先生は前者だったのでは。それにしても使った後の水は必ず有るわけですから、それに対する言葉が全くないというのはおかしいという意見には同感です。「ケ」という言葉で最初にうかんだのが「化」という言葉です。つまり「ばける」という字ですね。

稲場 昔の言葉というのは本当にわからないですね。例えば水だって、アイヌの人々は「ワカ」と言っていた。ところが「閩伽(アカ)」という言葉もある。これらの言葉と水とはそもそも発音が全く違います。そこで私には、水という言葉でさえ昔の人が何と言ったのか分からないんです。先程発表した「ケスイ」の場合、「スイ」の部分の検討が充分でないように、自信はないんです。

上ノ土 上水は新しい言葉だと言われましたが、その点賛成です。水自体が綺麗な場合、上水という概念は出てこないと思います。「水」と「汚れた水」、これが自然だと思います。だから上水という言葉が出て来たこと自体、新しいような気がします。下水という言葉の方が古いのではないのでしょうか。

中西 昔から水を捨てていたのだから、そういうこともうなずけます。それはそれとして、やはり文献できちんと押さえないと説得力がない。稲場説は決めてかかっているような所があるから。

稲場 確かにそのような側面はあります。でも下水という言葉

業を分析したのは柳田国男先生だけなんです。私は以前何の疑問も無く、下水は下水だと思っただけなんです。やはり柳田先生は偉い先生です。

斎藤 中西さんは厳しい意見だけれど、このような部分は文献が少ない。だからやむおえない所もありますよ。

私の田舎は百姓をしているのですが、便所は母家から離れた所にあつた。大きな木の溜めがあつて、ある程度溜まると裏の畑に運んで埋めた。すると長い間に浄化された。だから屎尿は川に流さなかつた。一方流しの排水ですが、流し台の排水管の先に網が付いていて、米粒や菜葉の切れ端は水路に出ないようになつていた。網の先は、小さい水路で、それが共同の小川に繋がつていた。このようになっていたように思います。下水がどの部分にあたるのかは問題ですが、ともかく自然の浄化力を随分活用していたように思います。

地方都市では町の中の水路で野菜を洗つたりしている。これを考えると、どの部分が今の下水という概念であらわされているのか、はつきりしない。どうも昔と今では下水のイメージ、概念が違つていたのではないか。そのような気がしません。市街地でも共同して掃除をした。生活共同体ですね。どうも昔と今で考え方が違う。その違いが言葉にも影響していると思います。

稲場 この前、照井さんが青梅市の「流れっぱ」を調べられ

ました。流れっぱは自然の沈澱機能を持った水路なんです。流れっぱは、別に「セセナゲ」とも言われるようです。照井さんが調査に行つたら、既に埋められてなくなつてしまつたが、話だけは聞かれた。ただいつ頃から有つたのかは分かりません。それからセセナゲもいろいろな都市的集落にあつたようです。ただそれらが何時造られたのかは分からない。私はこれらの施設は、日本人が決して流しっぱなしにしなかつたという良い例だと思つています。下水という言葉を通じて行くといふ時代の下水道のシステムがほんやりだけれど、透けて見えるような気がするんです。

熊井 標準語と方言ですが、やはり土地の生活や習慣を辿るためには標準語では駄目で、方言に頼る以外ない。下水といふのは標準語だと思ふんです。方言が基になつて標準語が出来る。だから下水という言葉だけで追及するのは問題で、もつと方言を追つて行くべきじゃないか。

稲場 方言の昔、つまり昔の方言を調べないといけないと思つれば、大変難しい。方言も変わつて行きますから。

谷口 現代人と古代人とは「けがれ」に対するイメージに相当の違いがあるのではないか。だから広いイメージでとらえた方が良いでしょう。抽象的な意味も含めてですね。「屎戸」に対するイメージもかなり違つたのかもしれない。現代人が漢字からイメージするものとは、同時代の人達

の間でも歴史風土が違うだけで同じ言葉に持つイメージが人によって違うことがあります。古代ともなればもっとひどいだろうと思うんです。

須藤 稲場さんがこのテーマにここまで拘った理由は何だったのですか。

稲場 下水という言葉の研究した人は私の知る限りでは柳田先生だけなんです。ところが先生は下水というイメージについて全く違ったものを提示された。私は先生の研究を知るまでは、下水という言葉に何一つ疑問を持っていませんでした。先生の説は私にはショックだったんです。先生は下水道の専門家ではない。ところが専門家は下水という言葉に疑問等全く持っていないんです。しかし、残念なことに先生は下水という言葉で「忘れてよい語」とされているのです。この点は極めて残念でした。下水は生活に密着している。民俗学はその下水を無視して良いわけがない。私はそう思ったんです。先生はそんなお考えですから、下水という言葉について深く研究されなかった。残念の一語に尽きます。こうして大きい研究領域が残されたんです。それで取り組んだのですが、考えが進むにつれて下水という言葉から昔の下水道のシステムが透けて見えるような気がし始めたのです。それに皆、近代下水道のイメージは持っているのですが、昔の下水道のイメージは持ってないんです。以上のような考えから大変価値

のある研究だと思ったんです。しかし、やはり用例が必要なんです。その面で檜原村や丹波山村での発見は貴重でした。東京の近くにあのように古い言葉が残っている地域があったとは驚きでした。私の研究は決して強引なこじつけだとは思わないんです。

藤森 丹波山村の「ケゴウズ」、これは貴重な情報だったと思います。標準語の下水と随分違う。地方に出張する機会に気を付けて、もっと違った言葉があるか調べてみたいと思います。

石丸 谷口さんの感想に近い気持ちです。学問的追及というよりもロマンを感じました。無茶な立論という印象はないんですが、言葉の検討を通じて、下水道の本質を提示する方向に向かっていっていると思います。下水文化の研究ですから、言語学的に正しいかといったことではなく、言語学といった方面を踏み台にしてヒントのようなものをどんどん集め、現在下水道が抱えている問題点、ひいては将来進べき方向を考える、祝詞に廻りながらも、むしろ将来について提言するような、そのような力を感じました。多少の論理の無理は、むしろ問題ではないと思います。

栗田 言葉が誕生する以前から人間はいたわけです。しかもそのような時代にも下水はあった。それほど古いんです。だから下水になんらかの言葉が当てはめられていたと思います。

外国語も調べると良いと思います。

北川 大変ロマンを感じました。上水という言葉がいつ頃登場してきたのか、その辺りは。

稲場 調べてないので分かりませんが、玉川上水は約四百年位前に出来たのでしょうか。上水奉行という制度も江戸時代にはあります。だから江戸時代の初めには上水という言葉はあったと思います。これから調べてみます。祝詞の中には上水という言葉はないような気がします。感じとして随分新しいような気がします。